

## 『十訓抄』「祭主三位輔親の侍」テスト問題

■（注意！）字数指定のある問題について、句読点、鍵括弧、記号など全てを字数に含む。

【一】本文について、設問に答えよ。

七条の南、室町の東一町は、祭主三位輔親が家なり。①丹後の天橋立をまねびて、池の中島をはるかにさし出だして、小松を長く②植ゑなどしたりけり。寢殿の南の廂をば、月の光入れんとて、鎖さざりけり。

③春の初め、軒近き梅が枝に、鶯の、定まりてX巳の時ばかり来て鳴きけるを、④ありがたく思ひて、それを愛するほかのことなかりけり。時の歌よみどもに、「⑤かかることこそはべれ。」と告げめぐらして、「明日のY辰の時ばかりに渡りて、聞かせたまへ。」と触れ回して、伊勢武者の宿直してありけるに、「かかることのあるぞ。人々渡りて、聞かんずるに、あなかしこ、鶯打ちなどして、やるな。」と言ひければ、この男、「⑥なじかはつかはし候はん。」と言ふ。輔親、「とく夜の明けよかし。」と待ち明かして、いつしか起きて、寢殿の南面を取りしつらひて、営みるたり。

辰の時ばかりに、時の歌よみども集まり来て、今や鶯鳴くと、うめきすめきし合ひたるに、先々は巳の時ばかり必ず鳴くが、Z午の時の下がりまで見えねば、いかならんと思ひて、この男を呼びて、「いかに、鶯のまだ見えぬは。今朝はいまだ来ざりつるか。」と問へば、「鶯のやつは、先々よりもとく参りてはべりつるを、帰りげに候ひつる間、召しとどめて。」と言ふ。「召しとどむとは、いかに。」と問へば、「取りて参らん。」とて立ちぬ。

⑦心も得ぬことかなと思ふほどに、木の枝に鶯を結びつけて持て来たり。おほかたあさましとも言ふばかりなし。「こは、いかにかくはしたるぞ。」と問へば、「昨日の仰せに、鶯やるな候ひしかば、言ふかひなく逃がし候ひなば、弓矢取る身に心憂くて、⑧神頭をはげて、射落としてはべり。」と申しければ、輔親も居集まれる人々も、あさましと思ひて、この男の顔を見れば、脇かいとりて、息まへ、ひざまづきたり。祭主、「とく立ちね。」と言ひけり。人々をかしかりけれども、この男のけしきに恐れて、⑨え笑はず。一人立ち、二人立ちて、みな帰りにけり。興さむるなどは、こともおろかなり。

問一 次の語句の読みをひらがな（現代仮名遣い）で書け。

①廂 ②鶯 ③宿直

問二 傍線部①は、現在のどの都道府県か漢字で答えよ。

問三 傍線部②「植ゑ」を例にならって文法的に説明せよ。

（例）みな帰りにけり。 《正解》ラ行四段活用 of 動詞「帰る」の連用形

問四 傍線部③とあるが、旧暦では具体的に何月から何月の間か。

問五 傍線部XとZは、それぞれ何時ごろを指すか。

問六 傍線部④の現代語訳として最も適切なものは次のうちどれか。

- ア ありがたいと思つて
- イ 恥ずかしいと思つて
- ウ めずらしいと思つて
- エ すばらしいと思つて

問七 傍線部⑤の内容を本文から二十八字で探して、はじめと終わりの三字を書け。